

1章 入試形態からみる社会学部生

1 はじめに

本章は、社会学部がおこなっているさまざまな入試形態に焦点をあてる。具体的には、属性などによって利用した入試形態に差があるのか、また、その入試形態により入学した学生はどのような大学生活をおくっていたのかを検討する。

大学に入学するには、必ず何らかの方法で選抜がおこなわれる。その選抜方法を大きくわければ、一般入試と推薦入試に分類できる。一般入試は学力のみの選抜であり、推薦入試は多様な基準による選抜である。この二つの方法によって、多くの大学は入学志願者を選抜してきた。しかし、すべての大学が必ずしも推薦入試をおこなってきたとは限らない。竹内（1987: 92）によると、推薦入試は大学のなかでも私立大学や短期大学に集中しており、さらには入学難易度のあまり高くない大学に偏っていることを示している。荻谷（2000）も推薦入試が高校生に安易な勉強態度を生み出す要因となっていることを述べている。また、最近の研究においても、中村（2008: 23）は私立大学に限っていえば、推薦入試とAO入試による2007年の入学者は一般入試の比率を上回り、一般入試は「一般」ではなくなりつつあると述べている。推薦入試の典型的選抜内容として考えられる面接・小論文のみという選抜方法が、私立大学のなかでも相対的に上位に位置しない大学で見られるとしている。このように、推薦入試の実施は上位の大学でありあまりおこなわれていないことや、安易な勉強態度を高校生にとらせてしまうことから、次のような推察が可能となる。それは、比較的上位に位置づけられる大学の推薦入試の入学者と一般入試の入学者の学力差が大きく、大学における授業の理解度に差がでるのではないかということである。こうした点で考えると、大学における授業をより理解している学生は、一般入試を経た学生だといえる。

その一方で、推薦入試を経た学生の方が、大学での学業成績は良好であるとの報告も存在する。難波（2005）は、医療系大学における入学者選抜方法と入学後の学業成績の関連を分析している。分析の結果、一般入試での入学者よりも推薦入試での入学者の方が、よい学業成績をあげていることを示し、その事由として、推薦入試での入学者が明確な目的意識をもって入学しているためだとしている。確かに、目的意識が明確なら、高校の成績に関係なく推薦入試を利用し、入学するだろう。しかし、難波（2005）の研究は単位取得が資格や就職と直結している大学を調査対象としているので、大学での単位取得と就職は基本的に両立しやすい。そのため、こうした結果は単位取得が就職と直結しない社会学部の学生を対象とした本章の分析において、あまり参考にならないといえる。では、本章と同じ社会学部を対象とした研究は、どのようなことを示しているのだろうか。山口（2004: 59）は、推薦入試による入学者に不本意入学者が少なく、高いモラルを持つことから、一般入試による入学者よりも順調に卒業や進

路を決定しているのではないかとしている¹。推薦入試は一般入試よりも比較的早い時期におこなわれるため、推薦入試を受けて大学に合格すれば、そのまま入学する予定にある者は多いだろう。それだけに不本意入学者は少なく、大学の授業にも集中できるのかもしれない。

では、同志社大学社会学部の場合、入試形態によってどのような違いがあるのだろうか。本章はそうしたことに焦点をおき、分析をおこなう²。

2 入試形態と入学前の状況（属性）

ここでは、社会学部の入学者の性別（問 1）、受験時の状況（現役か否か（問 5）・第一志望か否か（問 4））、家の状況（本の冊数（問 10）・18 歳時の経済状態（問 11））により入試形態（問 6）に違いがあるのかを把握する。本章で扱う入試形態の分類は、①一般入試やセンター試験、②指定校・公募・AO 入試、③内部などからの推薦入試の 3 分類である。編入学や社会人入学は、サンプル数が少ないこと（15 人）や上記三つの入試制度とは、特性や選抜対象が大きく異なるため、今回の分析には含めないこととした。

性別による入試形態をみると、推薦・AO と内部校推薦を利用して入学した多くは女性であった。また、当然ながら、現役の方が推薦・AO と内部校推薦を利用している。そして、推薦・AO と内部校推薦で入学した方が同志社大学社会学部を第一志望としていた。

家の状況と入試形態の関連をみると、内部校推薦を経た学生の家にある本の冊数、18 歳時の経済的豊かさがもっとも高い。こうしたことから、文化的・経済的資本のもっとも高いのは、内部校推薦を経た学生であることがわかる。

表 1 入試形態×性別

	男性	女性	合計(N)
一般・センター利用	52.3	47.7	100.0 (281)
推薦・AO	41.2	58.8	100.0 (34)
内部校推薦	28.8	71.2	100.0 (66)
合計	47.2	52.8	100.0 (381)

$\chi^2=12.419$ d.f.=2 p<0.05

¹ 山口 (2004) の分析対象は、関西圏の中堅私立大学の社会学科であり、同志社大学社会学部のなかの学科でいえば、社会学科がもっとも近いといえる。しかし、同志社大学社会学部には、大学での講義内容・単位取得と就職がほぼ直結しているといえる学科（社会福祉学科など）も存在する（付表 1 参照）ため、2 節以降の分析結果は留意を必要とする。

² 本章は、同志社大学社会学部の学生が、各入試形態によってどのような状況であるかに焦点を置く。そのため分析結果を本文に記す際、統計的に有意であるか否かは重視していない。より詳細な検討が必要な場合にのみ【注】や【付表】で示している。

表2 入試形態×現浪

	現役	浪人	合計(N)
一般・センター利用	57.7	42.3	100.0 (281)
推薦・AO	94.1	5.9	100.0 (34)
内部校推薦	100.0	0.0	100.0 (65)
合計	68.2	31.8	100.0 (380)

$\chi^2=55.217$ d.f.=2 p<0.01

表3 入試形態×第一希望か否か

	第一志望	第一志望以外	合計(N)
一般・センター利用	47.2	52.8	100.0 (282)
推薦・AO	91.2	8.8	100.0 (34)
内部校推薦	97.0	3.0	100.0 (66)
合計	59.7	40.3	100.0 (382)

$\chi^2=70.520$ d.f.=2 p<0.01

表4 入試形態×本の冊数

	-10冊	11-50冊	51-100冊	101-200冊	201-	合計(N)
一般・センター利用	14.5	32.3	16.0	16.0	21.3	100.0 (282)
推薦・AO	14.7	32.4	17.6	20.6	14.7	100.0 (34)
内部校推薦	7.5	25.4	17.9	22.4	26.9	100.0 (67)
合計	13.3	31.1	16.4	17.5	21.7	100.0 (383)

$\chi^2=6.196$ d.f.=8 n.s.

表5 入試形態×18歳時の経済状態

	豊か	ふつう	貧しい	合計(N)
一般・センター利用	31.3	52.7	16.0	100.0 (281)
推薦・AO	47.1	41.2	11.8	100.0 (34)
内部校推薦	58.2	37.3	4.5	100.0 (67)
合計	37.4	49.0	13.6	100.0 (382)

$\chi^2=19.825$ d.f.=4 p<0.01

3 入試形態と大学の授業への取り組み

次に、入試形態と大学の授業への取り組み（問14）の関連をみていく。表6から表10をみると、一般入試で入学した学生より、内部校推薦や推薦・AOで入学した学生の方が、授業への取り組みはまじめにおこなっているようだ³。

³ とはいえ、統計的に有意な差が示されているのは表10の授業への遅刻・欠席だけである。しかし授業態度の一つとされる遅刻・欠席は、入試形態だけでなく、他の要因も影響しているだろう。例えば、同志社大学社会学部を第一志望とし入学してきた学生は、授業への遅刻・欠席は少ないかもしれない。そこで授業への遅刻・欠席に対して、入試形態独自の効果が示されるのか検討するため、重回帰分析をおこなった（付表2）。分析結果をみると、一般・センタ

表6 入試形態×授業内容について教員に質問をする

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計(N)
一般・センター利用	6.5	27.0	46.8	19.8	100.0 (278)
推薦・AO	8.8	20.6	58.8	11.8	100.0 (34)
内部校推薦	11.9	31.3	46.3	10.4	100.0 (67)
合計	7.7	27.2	47.8	17.4	100.0 (379)

$\chi^2=7.497$ d.f.=6 n.s.

表7 入試形態×授業中のディスカッションに参加する

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計(N)
一般・センター利用	12.2	46.4	34.9	6.5	100.0 (278)
推薦・AO	23.5	26.5	41.2	8.8	100.0 (34)
内部校推薦	25.4	37.3	32.8	4.5	100.0 (67)
合計	15.6	43.0	35.1	6.3	100.0 (379)

$\chi^2=12.089$ d.f.=6 n.s.

表8 入試形態×授業の予習や復習をする

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計(N)
一般・センター利用	2.9	21.3	53.8	22.0	100.0 (277)
推薦・AO	5.9	14.7	64.7	14.7	100.0 (34)
内部校推薦	6.0	17.9	56.7	19.4	100.0 (67)
合計	3.7	20.1	55.3	20.9	100.0 (378)

$\chi^2=4.258$ d.f.=6 n.s.

表9 入試形態×ゼミの発表のために時間をかけて準備する

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計(N)
一般・センター利用	28.2	53.4	14.8	3.6	100.0 (277)
推薦・AO	45.5	39.4	15.2	0.0	100.0 (33)
内部校推薦	40.3	47.8	10.4	1.5	100.0 (67)
合計	31.8	51.2	14.1	2.9	100.0 (377)

$\chi^2=8.572$ d.f.=6 n.s.

一入試で入学した学生より推薦・AO、内部校推薦の学生は、授業への遅刻・欠席が少ないことがわかる。その他の大学の授業への取り組みを示す表6から表9においても同様の独立変数を用いて重回帰分析をおこなったが、入試形態独自の効果は示されなかった。

表 10 入試形態×授業に遅刻や欠席をする

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計(N)
一般・センター利用	9.4	35.4	36.8	18.4	100.0 (277)
推薦・AO	9.1	21.2	33.3	36.4	100.0 (33)
内部校推薦	13.4	20.9	34.3	31.3	100.0 (67)
合計	10.1	31.6	36.1	22.3	100.0 (377)

$\chi^2=13.162$ d.f.=6 $p<0.05$

4 入試形態と大学の学業成績

では、比較的まじめな内部校推薦や推薦・AOで入学した学生は、どのような学業成績（問7）をとっているのだろうか。表11がその分析結果である。これをみると、もっとも高いGPAをとっている（3.00～）割合は、推薦・AOの学生である。しかし、もっとも低いGPAをとっている（～1.99）割合も推薦・AOの学生であった。同志社大学社会学部の場合、推薦・AOの内訳としてスポーツによる選抜と学力に準ずる業績による選抜がおこなわれている。そのため、スポーツによる推薦で入学した学生は低いGPAとなり、学力に準ずる業績の推薦で入学した学生は高いGPAとなっているのかもしれない。また3節の表9、表10において、推薦・AOの学生は全体的に高い割合でゼミ発表の準備に時間をかけ、授業に遅刻・欠席しないにもかかわらず、結果として高いGPAと低いGPAに二極化している。そうした原因は、やはり学力とは異なる選抜によって入学したことによるのかもしれない⁴。

また、こうしたことはGPAの結果だけにみられることではない。表12は、試験前・レポート作成に助言を求められる頻度を示したものである。この結果から推薦・AOの学生は、在学中、あまり助言を求められていなかったことがわかる。卒業にむけての単位取得にもっとも苦労するのは、推薦・AOの学生、そのなかでもスポーツ推薦で入学した学生なのかもしれない⁵。

表 11 入試形態×GPA（成績）

	～1.49	1.50～1.99	2.00～2.49	2.50～2.99	3.00～	合計(N)
一般・センター利用	7.4	11.1	30.0	25.2	26.3	100.0 (270)
推薦・AO	3.1	25.0	28.1	12.5	31.3	100.0 (32)
内部校推薦	3.1	18.8	21.9	28.1	28.1	100.0 (64)
合計	6.2	13.7	28.4	24.6	27.0	100.0 (366)

$\chi^2=11.339$ d.f.=8 n.s.

⁴ AO入試にかんする最近の研究として、片瀬（2008）が詳しい。

⁵ 試験前・レポート作成に助言を求められる頻度は、入試形態によって統計的に有意な差を示した。内部校推薦で入学した学生が、比較的高いGPAであることから、このような結果となったのであろう。では、GPAをコントロールした後でも、入試形態によって試験前・レポート作成に助言を求められる頻度に差がみられるのであろうか。GPA以外のコントロール変数として、性別、同学科の同学年友人の有無、同学科の先輩・後輩の有無を含めて重回帰分析をおこなった（付表3）。その結果、他の要因をコントロールしたあとも内部校推薦で入学した学生は、他の入試形態にくらべて助言を求められている。内部校推薦で入学し、勉強のできる人当たりのよい男性が、もっとも助言を求められているようだ。

表 12 入試形態×試験前・レポート作成に助言を求められる

	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	なかった	合計(N)
一般・センター利用	16.4	52.7	24.2	6.8	100.0 (281)
推薦・AO	14.7	38.2	44.1	2.9	100.0 (34)
内部校推薦	27.3	54.5	15.2	3.0	100.0 (66)
合計	18.1	51.7	24.4	5.8	100.0 (381)

$$\chi^2=14.634 \text{ d.f.}=6 \text{ p}<0.05$$

5 入試形態と大学の授業満足度

次に、大学の授業満足度（問 17）をみていく。どの入試形態にかかわらず、基本的に授業満足度は高い。そのなかでも内部校推薦、推薦・AO で入学した学生の授業満足度が高い。こうした結果は、表 3 で示したとおり、内部校推薦、推薦・AO の学生に不本意入学の少ないことが考えられる。入学した大学が第一志望であれば、大学の授業にも集中できるのであろう。山口（2004）の示すことが、同志社大学社会学部にもあてはまるのかもしれない⁶。

表 13 入試形態×ファーストイヤーセミナーの満足度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
一般・センター利用	68.2	22.7	9.0	100.0 (277)
推薦・AO	73.5	20.6	5.9	100.0 (34)
内部校推薦	81.5	12.3	6.2	100.0 (65)
合計	71.0	20.7	8.2	100.0 (376)

$$\chi^2=4.890 \text{ d.f.}=4 \text{ n.s.}$$

表 14 入試形態×3・4 年次登録のゼミの満足度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
一般・センター利用	82.3	13.4	4.3	100.0 (277)
推薦・AO	94.1	5.9	0.0	100.0 (34)
内部校推薦	97.0	1.5	1.5	100.0 (66)
合計	85.9	10.6	3.4	100.0 (377)

$$\chi^2=11.971 \text{ d.f.}=4 \text{ p}<0.05$$

⁶ ちなみに第一志望か否か×大学の授業満足度の関連をみると、第一志望の方が総じて授業満足度は高い。分析は付表 4～6 に示す。

表 15 入試形態×大学で受けた教育全般の満足度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
一般・センター利用	63.0	29.3	7.6	100.0 (276)
推薦・AO	82.4	14.7	2.9	100.0 (34)
内部校推薦	73.8	23.1	3.1	100.0 (65)
合計	66.7	26.9	6.4	100.0 (375)

$\chi^2=7.532$ d.f.=4 n.s.

6 入試形態と卒業後の状況

最後に卒業後の状況（卒業後の進路（問 26）、卒業後の進路満足度（問 29）、学生生活全体の充実度（問 30））との関連をみていく。表 16 の卒業後の進路において、非正規の割合が推薦・AO で入学した学生でやや高い。そのためか卒業後の進路満足度を示す表 17 においても、推薦・AO で入学した学生の卒業後の進路満足度はもっとも低い割合となっている。学生生活全体の充実度を示す表 18 でもっとも充実度が低いのは一般・センター利用の学生であり、表 19 で示した再度入学するなら本学へ入学するか否かも、一般・センター利用の学生でもっとも低い割合となった。しかし、こうした結果は同志社大学社会学部が第一志望か否かと関連しているのかもしれない。そこで、第一志望か否かが学生生活全体の充実度と再度入学するなら本学へ入学するか否かに影響をおよぼしているかの分析をおこなった。すると、表 20 の第一志望か否かと学生生活全体の充実度は、それほど大きな差を示さない。4年間の学生生活のなかで第一志望でないことを受け入れ、前向きに学生生活を楽しんだ結果といえる。しかし、再度入学するなら本学へ入学するかとなると、話は別になる。表 21 をみると、同志社大学社会学部を第一志望としない学生は、やはり他の大学・学科に入学してみたいようだ。大学卒業時になっても、第一志望か否かということが何らかの影響を残しているのかもしれない⁷。

表 16 入試形態×卒業後の進路

	正規	非正規	進学	アルバイト 未決定	その他	合計(N)
一般入試・センター利用	81.3	3.0	10.1	3.7	2.2	100.0 (268)
推薦入試・AO	75.0	6.3	12.5	3.1	4.2	100.0 (32)
内部校推薦	82.0	3.3	9.8	1.6	3.8	100.0 (61)
合計	80.9	3.3	10.2	3.3	2.6	100.0 (361)

$\chi^2=2.483$ d.f.=8 n.s.

⁷ では、学生生活全体の充実度をコントロールしても、第一志望か否かの効果は残るのだろうか。付表 7 に重回帰分析の結果を示した。やはり学生生活全体の充実度によって、再度入学は大きく規定されている。しかし学生生活全体の充実度をコントロールしても、第一志望か否かの効果は示されている。

表 17 入試形態×卒業後の進路満足度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
一般・センター利用	80.6	14.0	5.4	100.0 (279)
推薦・AO	76.5	17.6	5.9	100.0 (34)
内部校推薦	93.8	4.6	1.5	100.0 (65)
合計	82.5	12.7	4.8	100.0 (378)

$\chi^2=7.369$ d.f.=4 n.s.

表 18 入試形態×学生生活全体の充実度

	充実していた	どちらでもない	充実していない	合計(N)
一般・センター利用	85.6	10.8	3.6	100.0 (278)
推薦・AO	91.2	5.9	2.9	100.0 (34)
内部校推薦	92.3	4.6	3.1	100.0 (65)
合計	87.3	9.3	3.4	100.0 (377)

$\chi^2=3.036$ d.f.=4 n.s.

表 19 入試形態×再度大学入学するなら本学へ入学

	入学する	どちらでもない	入学しない	合計(N)
一般・センター利用	70.3	20.8	9.0	100.0 (279)
推薦・AO	91.2	5.9	2.9	100.0 (34)
内部校推薦	86.2	9.2	4.6	100.0 (65)
合計	74.9	17.5	7.7	100.0 (378)

$\chi^2=12.397$ d.f.=4 p<0.05

表 20 第一希望か否か×学生生活全体の充実度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
第一志望	88.4	8.5	3.1	100.0 (224)
第一志望以外	85.5	10.5	3.9	100.0 (152)
合計	87.2	9.3	3.5	100.0 (376)

$\chi^2=0.669$ d.f.=2 n.s.

表 21 第一希望か否か×再度大学入学するなら本学へ入学

	入学する	どちらでもない	入学しない	合計(N)
第一志望	82.6	12.9	4.5	100.0 (224)
第一志望以外	63.4	24.2	12.4	100.0 (153)
合計	74.8	17.5	7.7	100.0 (377)

$\chi^2=18.509$ d.f.=2 p<0.01

7 要約と課題

本章では同志社大学社会学部のおこなっている入試形態に焦点をあて、その入試形態によっ

て入学前の状況、大学の授業への取り組み、学業成績、授業満足度や卒業後の状況に差があるかどうか分析をおこなった。最後に今回の分析から得られた結果を三つの入試形態ごとに示していこう。

内部校推薦を利用し、同志社大学へ入学した学生の多くは女性であり、同志社大学社会学部を第一志望としていた⁸。また、高い文化的・経済的資本をもつ学生が多く存在する。同志社大学の場合、中学校から一貫して同志社である学生（6年間私立の授業料を払える家庭）もいるため、高い文化的・経済的資本であることは当然なのかもしれない。高い文化的・経済的資本をもつ内部校推薦を経た学生は、授業への取り組みも比較的まじめであり、GPAも高く、試験前・レポート作成の助言をよく求められている。また、大学の授業満足度も高く、卒業後の進路満足度や学生生活満足度ももっとも高くなっている。こうした結果をみる限り、同志社大学社会学部において学校生活をいちばん楽しんでいるのは、内部校推薦を経て入学した学生かもしれない。

推薦・AOを利用して同志社大学へ入学した学生にも女性がやや多く、同志社大学社会学部を第一志望としていた。文化的・経済的資本は、内部校推薦ほど高くないが、授業への取り組みは内部校推薦と同等にまじめである。しかし、そのまじめさはあまり成果としてあらわれない。GPAは全体的にやや低く、試験前・レポート作成の助言もあまり求められないようだ。しかし最終的には学生生活に満足していそうであり、再度大学に入学するなら同志社大学だとしている。

一般・センター利用を経て入学した学生は、過半数が同志社大学社会学部を第一志望としていないことから、授業への取り組みはもっともまじめではない。しかしGPAが特別に低いことはなく、試験前・レポート作成の助言を他の学生からある程度求められている。内部校推薦や推薦・AOで入学した学生にくらべ、学力は高いはずなので、要領よく単位取得しているのかもしれない。満足度にかんしては総じて低く、再度大学に入学するなら同志社大学に入学するという割合ももっとも低い。もっとも学校生活を楽しんでいる内部校推薦を経た学生に反して、もっとも学校生活を楽しんでいないのは、一般・センター利用を経た学生なのかもしれない。

分析結果をみる限り、全体として入試形態による授業理解度やGPAの差よりも、むしろ学生生活にかんする満足度の差の方が、顕著に示されているように思う。入試研究は、入試選抜の公平性や妥当性に注目する傾向にあるが、同志社大学社会学部の場合、入試選抜の公平性や妥当性に対する対策よりも、不本意入学者に対して、どのような対策を講じるかが重要だと考える。

⁸ 推薦入試を利用する者が女性に多いことは、すでに吉原（1998）によって示されている。吉原（1998: 60）によると、女子に対する浪人忌避規範が、男子よりも女子の推薦入試利用率を高めており、入試が偏差値を基準としたメリトクラティックに一貫しているとはいいたいとしている。こうしたことが、同志社大学社会学部にもあてはまるのかもしれない。

【付表】

付表1 学科×就職先の職種

	決まってい ない	事務職	営業職 販売職	技術職 (SE職)	運輸・通信 の仕事	保安の 仕事	サービスの 仕事	教員	マスコミ 関係	介護・福祉 関係	その他の 専門職	農業・林業 漁業	その他	合計(N)
社会学	18.6	27.1	27.1	12.9	0.0	0.0	7.1	0.0	2.9	0.0	1.4	0.0	2.9	100.0 (70)
社会福祉学	14.5	31.9	21.7	4.3	1.4	0.0	4.3	1.4	0.0	14.5	4.3	0.0	1.4	100.0 (69)
メディア学	24.2	13.6	27.3	1.5	1.5	0.0	6.1	3.0	15.2	0.0	0.0	1.5	6.1	100.0 (66)
産業関係学	34.8	10.9	45.7	4.3	0.0	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	100.0 (46)
教育文化学	17.9	23.2	19.6	10.7	0.0	1.8	10.7	12.5	0.0	0.0	1.8	0.0	1.8	100.0 (56)
合計	21.2	22.1	27.4	6.8	0.7	0.7	5.9	3.3	3.9	3.3	1.6	0.3	2.9	100.0 (307)

$\chi^2=138.514$ d.f.=48 p<0.01

付表2 授業への遅刻・欠席（あてはまる:4～あてはまらない:1）を従属変数とした重回帰分析

	非標準化	標準化
性別ダミー(男=1)	.240 *	.130
第一志望ダミー(第一志望=1)	.097	.052
現役ダミー(現役=1)	.171	.086
高3時豊かさ(1～5) ^{注)}	.032	.029
推薦・AOダミー	-.414 *	-.128
内部校推薦ダミー (参照カテゴリは一般・センター)	-.314 *	-.128
調整済み R ²	.021	
サンプル数 N	370	

*p<5%

注)下:1～上:5

付表3 試験前・レポート作成に助言を求められる頻度（よくあった:4～なかった:1）を従属変数とした重回帰分析

	非標準化	標準化
GPA(1～5) ^{注)}	.216 **	.326
性別ダミー(男=1)	.223 **	.141
同学科の同学年の友人ダミー(いる=1)	.680 **	.134
同学科の先輩・後輩ダミー(いる=1)	.219 **	.138
推薦・AOダミー	-.026	-.009
内部校推薦ダミー (参照カテゴリは一般・センター)	.290 **	.138
調整済み R ²	.160	
サンプル数 N	361	

**p<1%

注) -1.49: 1～3.00 -: 5

付表4 第一希望か否か×ファーストイヤーセミナーの満足度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
第一志望	77.2	17.0	5.8	100.0 (224)
第一志望以外	61.6	26.5	11.9	100.0 (151)
合計	70.9	20.8	8.3	100.0 (375)

$\chi^2=11.129$ d.f.=2 p<0.01

付表5 第一希望か否か×3・4年次登録のゼミの満足度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
第一志望	90.7	5.8	3.6	100.0 (225)
第一志望以外	78.8	17.9	3.3	100.0 (151)
合計	85.9	10.6	3.5	100.0 (376)

$\chi^2=13.937$ d.f.=2 p<0.01

付表6 第一希望か否か×大学で受けた教育全般の満足度

	満足	どちらでもない	不満	合計(N)
第一志望	71.3	22.4	6.3	100.0 (223)
第一志望以外	59.6	33.8	6.6	100.0 (151)
合計	66.6	27.0	6.4	100.0 (374)

$\chi^2=6.165$ d.f.=2 p<0.05

付表7 再度大学入学するなら本学へ入学（入学する:5～入学しない:1）を従属変数とした重回帰分析

	非標準化	標準化
学生生活全体の充実度(1～5) ^{注)}	.613 **	.494
性別ダミー(男=1)	-.101	-.049
第一志望ダミー(第一志望=1)	.519 **	.245
推薦・AOダミー	.142	.039
内部校推薦ダミー (参照カテゴリは一般・センター)	.077	.028
調整済み R ²	.338	
サンプル数 N	374	

**p<1%

注) 充実していなかった: 1～充実していた: 5

【参考文献】

- 苅谷剛彦, 2000, 「入学者選抜と「学力」問題」『IDE 現代の高等教育』(416): 45-9.
 片瀬一男, 2008, 「AO 入試に関する試論 (1) ——教養学部における AO 入試入学者の成績の推移を事例に」『東北学院大学教育研究所報告集』(8): 31-45.
 中村高康, 2008, 「大学入学者選抜の変容——推薦入試・AO 入試の拡大を中心として」『IDE

現代の高等教育』(506): 23-7.

難波哲子・岡真由美・田淵昭雄, 2005, 「川崎医療福祉大学感覚矯正学科視能矯正専攻学生における入学者選抜方法と入学後の経過——1995～2004 年度卒業生について」『川崎医療福祉学会誌』(15): 183-90.

竹内 洋, 1987, 「第6章 産業社会の選抜とディレンマ——加熱・冷却論再考」京都大学教育学部入試検討委員会『大学入試改善に関する社会的要請の研究』: 78-104.

山口 洋, 2004, 「4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か? ——ある私大での追跡調査」佛教大学学術委員会社会学部論集編集委員会編『社会学部論集』(38): 49-62.

吉原恵子, 1998, 「異なる競争を生み出す入試システム——高校から大学への接続にみるジェンダー分化」『教育社会学研究』第62集: 43-67.

(1章担当: 西丸良一、教育GPアカデミックアドバイザー、博士後期課程)